



日本のスポーツの聖地として数々の名勝負を見守ってきた国立競技場。
その大切な歴史を継承しながら、
これからのスポーツと文化を発信する
日本らしいスタジアムとして生まれ変わりました。

名称 国立競技場
(JAPAN NATIONAL STADIUM)

所在地 東京都新宿区霞ヶ丘町10番1号
敷地面積 約109,800m²
建築面積 約69,600m²
延べ面積 約192,000m²
高さ 約47m
大きさ 南北方向約350m、東西方向約260m
階数 地上5階、地下2階
観客席数 67,750席(うち車いす席約500席)



現在の国立競技場

国立競技場の変遷

1924年(大正13年)10月

日本初の本格的陸上競技場として、国立競技場の前身である明治神宮外苑競技場が青山練兵場跡地に完成。



明治神宮外苑競技場

1958年(昭和33年)3月

明治神宮外苑競技場解体後に、第3回アジア競技大会のメイン会場として国立競技場が完成。



完成当時の国立競技場

1964年(昭和39年)10月

第18回オリンピック競技大会・東京大会のメイン会場として、開・閉会式、陸上競技、サッカー及び馬術が行われた。



2014年に56年間の歴史に幕を閉じた旧国立競技場

2019年(令和元年)11月

2016年12月に着工し、2019年11月に完成。2021年に、第32回オリンピック競技大会及び東京2020パラリンピック競技大会のメイン会場として、開・閉会式、陸上競技が行われた。



神宮の杜と調和する 日本らしいスタジアム

柔らかな陰影と温かい質感をつくる
木の縦格子と緑で構成されたスタジアムは、
明治神宮外苑の緑豊かな環境に溶け込み、
訪れる人々を温かく迎え入れます。



国産木材の利用

国産木材と鉄骨を組み合わせた部材を
大屋根に用いることで、全ての観客席から
木の温もりを感じることができます。



47都道府県の木材を使用した軒庇

スタジアムの特徴のひとつでもある外周の軒庇は、
木の縦格子を全周に張り巡らせた構成です。
これら1本1本の木材を47都道府県から調達し、
それぞれの方位に向けて配置しています。

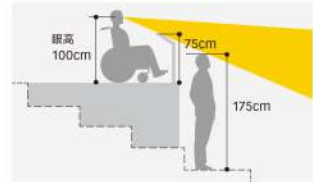
アースカラーの観客席

アスリートと観客の一体感を高める国内最大の
すり鉢状3層構造。下から上に向かって
段階的に変化したモザイク状のアースカラーで、
緑豊かな周辺環境と調和する空間です。



車椅子使用者の観戦環境

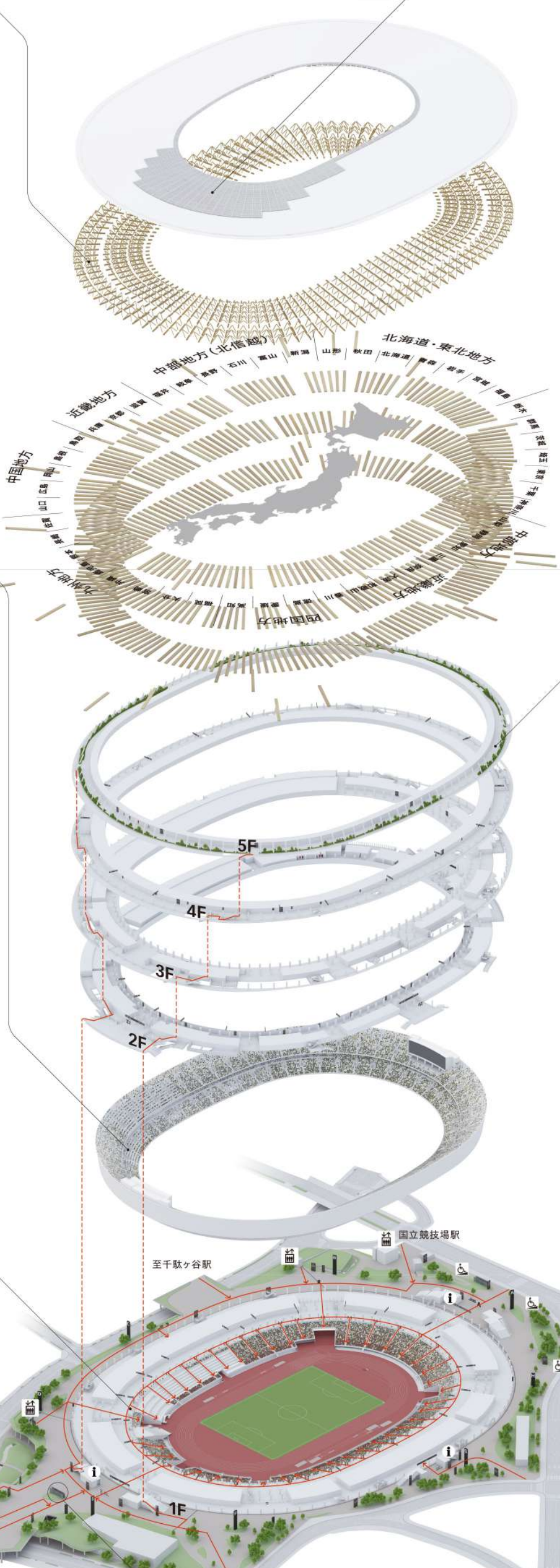
スタンドの全層に車椅子席を設置。
敷地から1階はフラットで、より快適に
アクセスすることができます。同伴者と共に
感動を分かち合える観戦環境です。



眼高の低い車椅子使用者のサイトラインを確保するため、
眼高100cmを標準とし、前列の人が立ち上がった状態でも
車椅子の視界を妨げることはありません。

訪れる人々をフラットに迎え入れる

年齢や障害に関係なく、全ての人に対して負担が
少なく安全に移動できる環境を整備しています。
スタジアムへは緩い勾配で、車椅子使用者や
足腰の弱い方でも快適かつ安全にアクセスできます。
主要ルートには誘導ブロックや音声案内サイン
などを設置し、視覚障害の方も安全に迎えます。



大屋根のトップライト

大屋根の南側にトップライトを配置し、
天然芝に効率よく自然光を取り込みます。
これはピッチ面に対する日照分布
シミュレーションから導びいた
冬の天然芝育成に最も適した形状です。

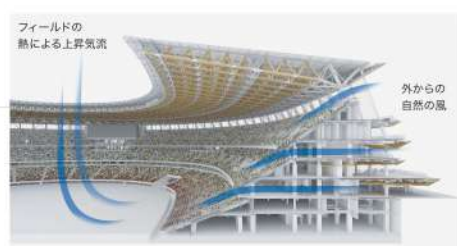
空の杜

スタジアム5階の屋上空間「空の杜」は、
一周が約850mにも及びます。
サクラ、ウメ、モミジなどの草木が植えられ
散策を楽しむことができます。



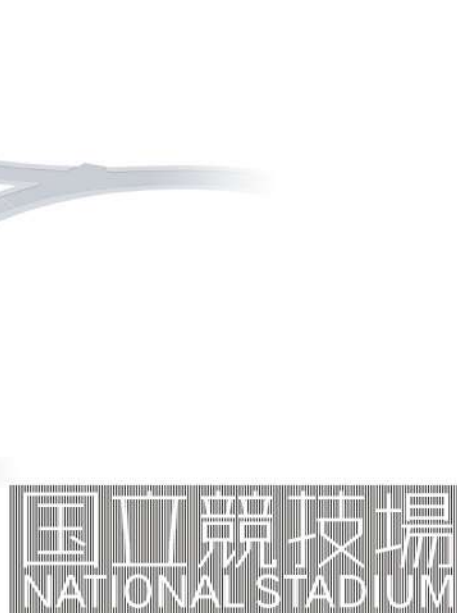
自然の風

「風の広庇」や「風のテラス」から自然の風を
取り込み、気流循環をつくり出します。
熱や湿気、観客から発生する熱気等を外へ排出し、
観客席とフィールドの温熱環境を改善します。



多様性に応えるトイレ環境

年齢、性別、障害により異なる多様なニーズ
に対応する、安全性に配慮した環境です。
全ての男女別一般トイレにはオストメイト、
親子対応ブースなどを設置しています。
また、車椅子使用者のためのトイレや、
男女共用トイレなど様々な利用者を想定した
アクセシブルトイレも設置しています。



スタジアム正面に設えたルーバーサインは
建物と呼ぶデザインとし、二重に設置したルーバーによって
視点の動きで動的な視覚効果が発揮されます。

至外苑前駅
至千駄ヶ谷駅
至信濃町駅
至青山一丁目駅
← アクセス動線